

「子供主体の学び」への転換を支える 門真市教育委員会の挑戦

～伴走チームの専属配置と、軽井沢風越学園との連携が生み出す授業改善～

1 はじめに

本市教育委員会では、「将来の自立をめざして自分の生き方を見つける教育」の実現に向け、「子供主体の学び」と「探究的な学び」を柱とした令和の日本型学校教育の推進に取り組んでいます。

5月号では、この改革を牽引するリーダー層（管理職・指導主事）の資質能力向上に焦点を当て、市教委内の組織改革や対話を重視した研修の刷新について発信しました。

教育委員会月報5月号

「対話」が拓く学校運営改革



本稿では、学校現場への直接的なアプローチとして、現場の教員に寄り添う「伴走支援」に特化した特別チームの配置と、先進校である学校法人軽井沢風越学園との連携施策について、その具体的なプロセスと確かな成果をご紹介します。

2 「伴走チーム」発足の背景と目的

本市では、令和3年度からの3年間、児童・生徒の学力向上をめざし、市を挙げて『指導と評価の一体化』を核とした授業改善や校内組織体制構築に取り組

んだ「学力向上アクションプラン」を展開し、令和5年度の全国学力・学習状況調査において過去最高の数値を記録しました。一方で、確かな成果は見られたものの、児童・生徒の学びへの主体性や自己学習力の弱さといった、数値だけでは測れない次なる課題も浮き彫りになりました。

真の学力の土台を支える要素は、子供たちの学習意欲や主体性、自己肯定感といった非認知能力の向上であり、これらを育成する日々の授業改善をどのように支えるかが大きな課題でした。本市の指導主事は、元々「管理・監査型」のスタンスを取っていたわけではありません。しかし、従来の指導主事は多岐にわたる事務分掌を抱えており、さらに人数にも限界があったため、各学校への丁寧な関わりにはどうしても限界がありました。

そこで、先進的に学校支援の仕組みを構築している石川県加賀市等の先例を視察・研究し、本市でもその他の事務を持たず、学校への伴走支援のみに100%注力できる独立した特別チームを立ち上げることにしました。特に、チームリーダーを外部から新たに任用し、リーダーに加えて指導主事2名の計3名を「伴走専属」として配置できたことは、本市の本気度を示す非常に大きな一歩となりました。

3 教員に寄り添う日常的な伴走支援

「子供主体の学び」や「探究的な学び」への挑戦に

において、現場の教員は「何を教えるか」という従来の授業観から、「子供がどう学ぶか」への転換を迫られていました。理念は頭で理解できても、いざ日々の授業でどう子供に委ねるのか、学習環境(単元全体の設計や、子供が学びを選択できる教室の空間配置など)をどうデザインすればよいのかが分からず、多くの教員が悩みを抱えていました。

他の事務に追われることのない専属の伴走チームは、予定された研究授業だけを見に行く存在ではありません。日常的に学校へ足を運び、教員と同じ目線で子供たちの様子を観察し、共に汗を流しながら授業を作り上げています。伴走チームが学校に入った日のスケジュールは非常に濃密です。じっくりと授業を観察し、時には実際の授業に加わり、そして、放課後には教員との対話の時間を持ちます。そこでは、「この場面ではあの子に委ねてみませんか」「教室の環境をこう変えてみましょう」といった具体的なアイデアを交わし、教員が抱えていた悩みを共に解消していきます。



『伴走チームと教員が共に授業検討』

このような関わりが日常化するにつれ、現場の空気が変わっていききました。教員自身が子供の「やりたい」を引き出すおもしろさや手応えを感じるようになり、実際に現場の教員からは、「これまでと授業づくりの視点が変わり、一人ひとりの子供の学びの姿をより深く見取ることができるようになりました」という嬉しい声が寄

せられています。

こうした日常の伴走支援の様子については、写真入りレポート(ドキュメンテーション)の活用により、伴走チーム以外の指導主事等とも共有されており、今では部署や担当者の垣根を越えた「ジェル型伴走支援」(※5月号参照)へと進化を続けています。

「子ども主体の学び」or「探究的な学び」

〇〇小 6年研究授業

2025年6月10日(火) 13:30~14:15
授業者: 担任
教科: 算数(分数÷分数)
教室: 6-1
作成者: 伴走チーム

いろいろな方法見つけてください。
でも他の先生とかにすぐ
「教えて〜」はやめてや!

今日やることを短時間で説明

それぞれが一斉に開始

「何個め?」
「わたし2個め」

集中力を感じる
説明文だなあ

ヒントカードを選びに行く ノートに書き方をまとめる

先生と一緒に考えてみる児童

全部は教えない。
「後はできる?」
というところまで。

【おまかな流れ】

- ①全体説明
- ②それぞれの学びへ
- ③ふりかえり
- ④まとめ

◆実践者の願い

- ・冒頭に全体へ「いろんな方法見つけてください」と伝えている。
- ・まずは自分で考えてみることにして「他の先生とかにすぐ“教えて〜”というのやめてや〜」と子どもたちに伝えている。
- ・「分数÷分数の計算の仕方考え、自分の考えをもつ」ということが本時の目標に設定されている。
- ・授業者のチャレンジを、他の先生方(観察者)がどのような視点で見るとよさそうか?

◆「揃わない」ということ

- ・「一人で考える」「教科書をつかう」「友だちにさぐ」「先生と一緒に考える」「ヒントカードを取りに行く」等が一斉に同時並行している。
- ・意図がはっきりせずに自席を離れて教室を漂っている数人が授業者に注意されている。
- ・大きな声で騒いだり、邪魔したりする様子は見られず、それぞれの“学び方”で進めている。
- ・他に何かちがう「学び方」は考えられそうか?

◆「委ねる」ということ

- ・冒頭の説明は10分ほどで済ませ、最後数分の振り返りを除いて、残りの時間は指示されることなく子どもたちそれぞれが進んでいる。
- ・それぞれが気付いた方法や気付きを、それぞれの書き方でノートへまとめていく。
- ・「学び方」を指定していない。
- ・「委ねる」ことを通して、子どもたちのどんな姿をめざすのか?
- ・「委ねる」ことでどんな力を育てたいのか?

『ドキュメンテーション』

また、伴走支援の成果については、「令和の日本型学校教育」の実現に向けた状況を把握するために実施した教員アンケートにおいても現れています。

例えば、「子供主体の授業を意識している」との回答が令和6年度から7年度で、小学校では50%から71%へ、中学校では51%から65%へと上昇しました。この結果から、現場の授業観・学習観が着実に転換していることがうかがえます。

実践にあたり、「校内研修や同僚との対話が役に立つ

ている」とのアンケート回答が多く見られることから、伴走チームが促進する「対話型の校内研修」が、授業改善の要として確実に機能していると感じています。

4 軽井沢風越学園との連携と「アウトプットデイ」の実践

伴走チームによる指導助言をさらに充実させ、現場への支援の質を確かなものとするため、本市では探究的な学びの先進校である軽井沢風越学園との自治体連携事業をスタートさせました。

同園の先進的な実践から直接学ぶため、伴走チームの指導主事や各校の担当教員を計画的に派遣し、最先端の「子供主体の学び」や「探究的な学び」における理論と実践の往還を本市へと持ち帰る体制を整えています。とりわけ、伴走チームの指導主事は、単日での視察に留まらず、1学期間スタッフとして同園で実際に勤務することで、表面的な手法だけではなく、取組の背景や根底に流れる教育理念まで深く吸収することができました。



『風越学園で学ぶ指導主事』

この連携は、今年度開校した本市初となる義務教育学校である「水桜学園」のブランディングや、9年間の教科横断的な総合的な学習の時間のカリキュラム検討において、大きな原動力となっています。



特色のあるカリキュラム 水桜TGALとは？ Think Globally, Act Locally →地球（世界）規模で考えて、地域で行動する～

水桜TGAL **内容**

TGALとは **Think Globally, Act Locally**
地球（世界）規模で考えて、地域で行動する

総合的な学習の時間（低学年は生活科）を核として、教科横断的な探究型の学習を行っています。
決まった題材を用いた、
「**テーマプロジェクト**」
子どもたち自身で選択し、異学年で取り組む
「**Likeプロジェクト**」
生活科から派生させ、探究する
「**マイプロジェクト**」 の3つです。

対象学年

R7 対象学年

1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生	7年生	8年生	9年生
1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生	7年生	8年生	9年生
1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生	7年生	8年生	9年生
1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生	7年生	8年生	9年生

※今後変更する可能性があります。

『義務教育学校 水桜学園』

この連携から生まれた具体的な取組の一つが、現在、本市の多くの学校で開催されている「アウトプットデイ」です。子供たちが個人や集団で探究した内容を、保護者や地域、企業の方などの外部に向けて主体的に発信し、様々なフィードバックをもらい、さらにその先の探究に生かすこの取組は、風越学園での先進的な実践を



『アウトプットデイの様子』

参考に導入したものです。地域や民間の力を借り、開かれた場で表現することで、子供たちの探究心や表現力は目に見えて深まっています。

の先生方と苦楽を共にしながら、総力を挙げた学校への伴走支援を継続・強化してまいります。

5 成果と次なる課題

こうした伴走支援と外部連携の成果は、客観的なデータとしても、はっきりと表れています。

令和7年12月実施の「学校教育診断」では、児童・生徒へのアンケートで「授業では、自分で考え自ら取り組んでいる」「自分の考えをまとめ、発表する機会がある」といった「授業における主体的な学び」に関する肯定的な回答の割合が過去最高を記録しました。併せて、教員へのアンケートでも「教職員間で相互に学び合い研修等で学んだ成果が共有され活かされている」の項目が、令和5年度から7年度で、76.7%から89.7%へ上昇しており、一連の取組が現場の確かな行動変容につながっていることを裏付けています。

一方で、市内全校へのさらなる実践促進に向けては、教員ごとの意識や取組状況にばらつきがあるなど、まだまだ乗り越えるべき課題は残されています。今後は、どのように市内の隅々までこの「学びの転換」を浸透させていくかが重要な局面となります。

6 おわりに

「教師の学びと子供の学びは相似形」と言われますが、教育行政と学校現場もまた相似形であると考えています。教育行政側が変わることで学校が変わります。教師自身が伴走支援を受けた経験が、その後の子供たちへの丁寧な伴走へと還元されていきます。

子供たち一人ひとりが、「やりたい」という気持ちを原動力に、自ら学びを切り拓いていく日常をつくるために、これからも門真市教育委員会は一丸となり、現場